

## 2013 年度温室効果ガス<sup>※1</sup> 排出量の調査結果について

名古屋市環境局環境企画課  
平成 28 年 3 月

2013 年度（確定値）および 2014 年度（速報値<sup>※2</sup>）における温室効果ガス排出量の調査結果をとりまとめましたので、調整後排出量（京都メカニズムクレジット<sup>※3</sup> 反映後排出量）と実排出量（京都メカニズムクレジット反映前排出量）をお知らせします。

- 2013 年度（確定値）は、基準年度（1990 年度）から 9.1%減少した一方で、前年度（2012 年度）から 17.7%増加しました。京都議定書第一約束期間（2008～2012 年度）が終了したことに伴い、電力原単位<sup>※4</sup>が大きく変化したほか、エネルギー消費量が前年度から増加したことなどによるものです（電力原単位推移については次頁参照）。
- 2014 年度（速報値）は、基準年度（1990 年度）から 13.2%減少し、前年度（2013 年度）から 4.4%減少しました。電気事業者による取組みにより電力原単位<sup>※4</sup>が改善したほか、エネルギー消費量が前年度より減少したことなどによるものです。

### <京都メカニズムクレジット反映後排出量>

単位：万トン-CO<sub>2</sub>(CO<sub>2</sub>換算値)

区分	1990年度 (基準)	2012年度	2013年度 (確定値)	2014年度 (速報値)	2020年度 (目標)
温室効果ガス 排出量	1,739	1,343	<b>1,581</b>	<b>1,510</b>	1,310
基準年度比		△22.8%	<b>△ 9.1%</b>	<b>△13.2%</b>	△ 25%
前年度比		△11.5%	<b>+17.7%</b>	<b>△ 4.4%</b>	

### <参考：京都メカニズムクレジット反映前排出量>

単位：万トン-CO<sub>2</sub>(CO<sub>2</sub>換算値)

区分	1990年度 (基準)	2012年度	2013年度 (確定値)	2014年度 (速報値)	2020年度 (目標)
温室効果ガス 排出量	1,739	1,563	<b>1,587</b>	<b>1,515</b>	1,310
基準年度比		△10.1%	<b>△ 8.8%</b>	<b>△12.9%</b>	△ 25%
前年度比		△ 2.0%	<b>+ 1.5%</b>	<b>△ 4.5%</b>	

※1 温室効果ガスとは、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）、メタン（CH<sub>4</sub>）、一酸化二窒素（N<sub>2</sub>O）、ハイドロフルオロカーボン類（HFC）、パーフルオロカーボン類（PFC）、六ふつ化硫黄（SF<sub>6</sub>）、三ふつ化窒素（NF<sub>3</sub>）の7種類を指します。

※2 速報値は、重油、灯油などの燃料等一部のデータを 2013 年度値で代用していることから、今後とりまとめる確定値との間に誤差が生じます。

※3 京都メカニズムクレジットとは「京都議定書」で定められた、温室効果ガス削減をより柔軟に行うために、海外における排出削減量等を自国の排出量削減分に割り当てることができるものです。

※4 電力原単位は、1 キロワット時の電気を使用した場合の二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量のこと、化石燃料の燃焼（火力）、原子力、水力、風力等の発電方式の比率によって変動します。

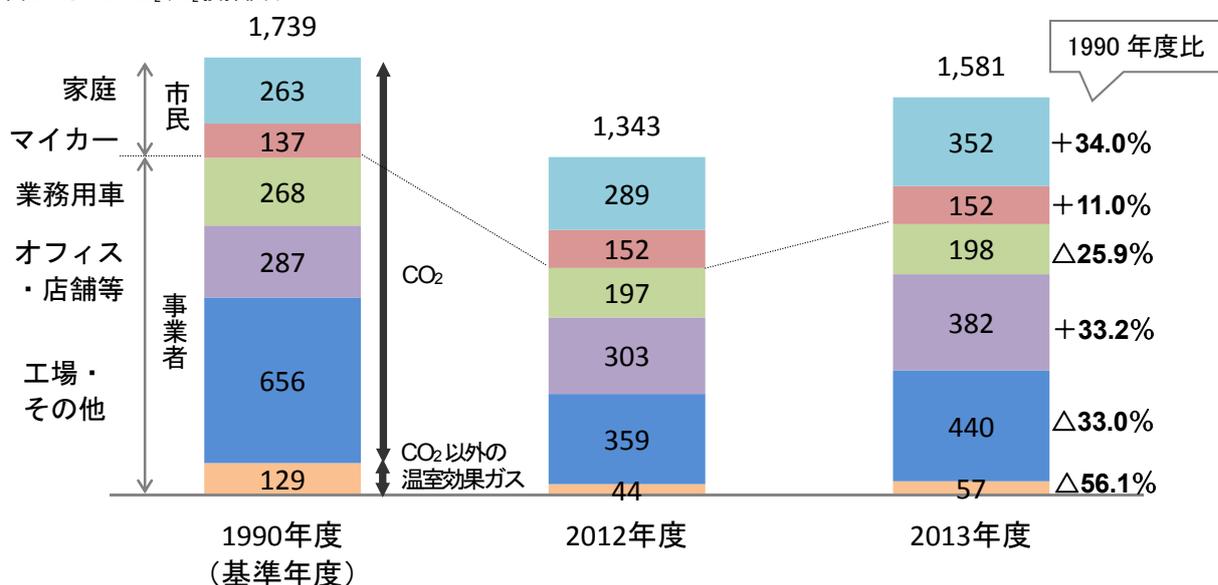
# 1 2013年度の温室効果ガス排出量（確定値）について

## (1) 京都メカニズムクレジット反映後の排出量

- 部門別排出量を基準年度と比較すると、業務用車、工場・その他からの二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量は減少しています。一方、家庭、マイカー、オフィス・店舗等からの二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量は増加しています。
- 2013年度は、冬は平年並の寒さでしたが、夏の平均気温が統計開始以来1位タイ（2010年度と同じ）の高温となったほか、真夏日日数が統計開始以来最多になるなど、夏は記録的な猛暑となりました。また、市内総生産は前年度より増加し、経済活動が好転しました。
- 記録的な猛暑や経済活動の好転を考慮すると、2013年度のエネルギー消費量は大幅に増加するところですが、2013年度のエネルギー消費量の増加は経済活動の伸びと同じレベルにとどまりました。これは、市民・事業者の環境に配慮した取組みが現れているものと考えられます。
- しかしながら、京都議定書第一約束期間（2008～2012年度）が終了したことに伴い、電気事業者による京都メカニズムクレジット等の反映量が減少したことで電力原単位が悪化したため、電気の使用に伴う二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量が増加し、全体として温室効果ガス排出量も前年度より増加する結果となりました（基準年度より△9.1%、前年度より+17.7%）。

### 部門別温室効果ガス排出量の推移（京都メカニズムクレジット反映後排出量）

（単位：万トン-CO<sub>2</sub>（CO<sub>2</sub>換算値））

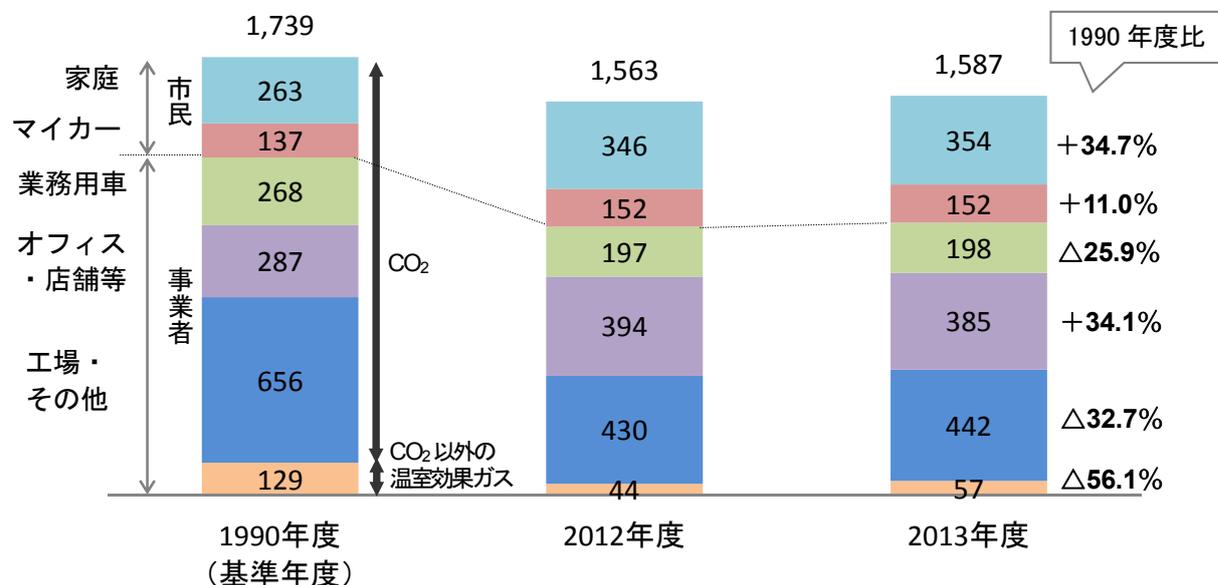


## (2) 京都メカニズムクレジット反映前の排出量

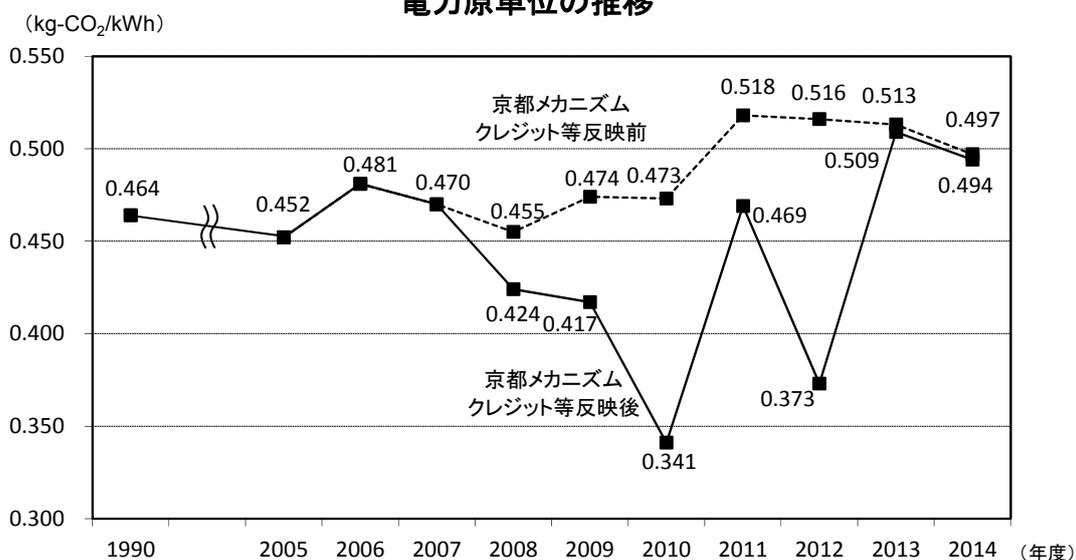
- 部門別排出量を基準年度と比較すると、業務用車、工場・その他からの二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量は減少しています。一方、家庭、マイカー、オフィス・店舗等からの二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量は増加しています。
- オフィス・店舗等では、事業者の環境に配慮した取組みにより電気の使用量が前年度と比較して減少し、二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）排出量も減少しています。
- また、電気事業者の取組みにより電力原単位は前年度より0.6%改善しましたが、全体としてエネルギー消費量が前年度より増加し、CO<sub>2</sub>以外の温室効果ガス排出量も増加したため、温室効果ガス排出量も前年度より増加する結果となりました（基準年度より△8.8%、前年度より+1.5%）。

### 部門別温室効果ガス排出量の推移（京都メカニズムクレジット反映前排出量）

（単位：万トン-CO<sub>2</sub>(CO<sub>2</sub>換算値）



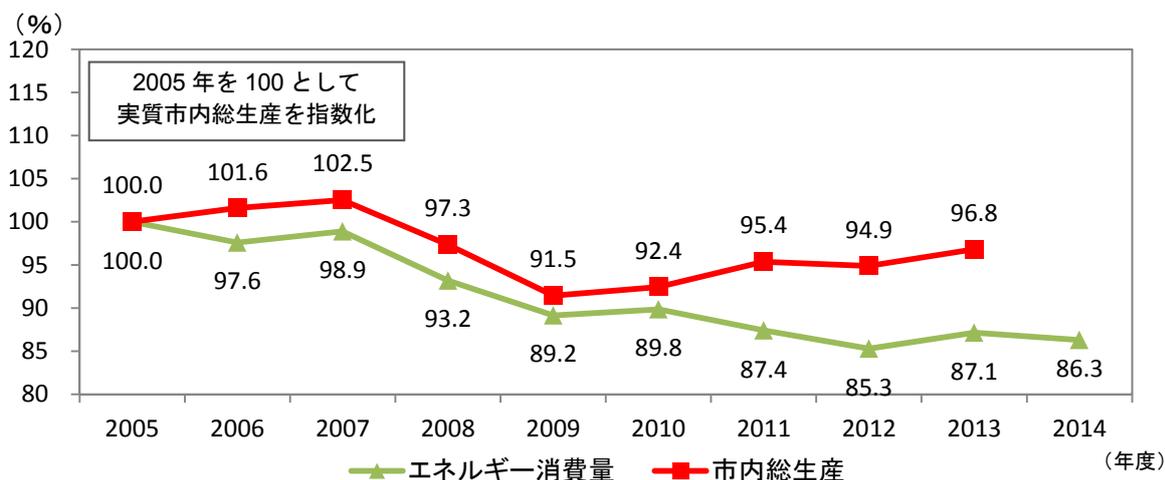
### 電力原単位の推移



## 2 2014年度の温室効果ガス排出量（速報値）について

- 2014年度は、市民・事業者のエコライフや環境に配慮した取組みに加え、冬の平均気温は前年度とほぼ同じ（前年度差 $-0.1^{\circ}\text{C}$ ）となり、夏の平均気温が前年度より低く（前年度差 $-0.8^{\circ}\text{C}$ ）なったことから、エネルギー消費量が減少しました。
- 京都メカニズムクレジット反映後排出量は、電力原単位が電気事業者の取組みにより前年度より2.9%改善したことで、電気の使用に伴う二酸化炭素（ $\text{CO}_2$ ）排出量も減少し、全体として温室効果ガス排出量も前年度より減少する結果となりました（基準年度より $\Delta 13.2\%$ 、前年度より $\Delta 4.4\%$ ）。
- また、京都メカニズムクレジット反映前排出量は、電力原単位が前年度より3.1%改善したことで電気の使用に伴う二酸化炭素（ $\text{CO}_2$ ）排出量が減少し、全体として温室効果ガス排出量も前年度より減少する結果となりました（基準年度より $\Delta 12.9\%$ 、前年度より $\Delta 4.5\%$ ）。

### <参考> 市内総生産と最終エネルギー消費量の推移



※ 2014年度の市内総生産は公表前です。

注) 数値は四捨五入しているため、合計等が一致しない場合があります。